農業土木を支えてきた人々

水戸藩利水家・永田茂衛門一族の事蹟

川　田　弘　二*　菅　原　忠　邦**

I. はじめに

現在の茨城県の，ほぼ三分の一を占めていた水戸藩三十五万石が常陸国に定住するまでは，平安末期から500年の間，佐竹氏がこの地を領し，常陸国の北半分に強大な勢力を築きあげていた。それが第20代藩主佐竹義宜の慶長7年（1602）に徳川家康の不信を買って，二十万石に減封のうえ出羽秋田に国替になった。佐竹氏の後へ封ぜられたのが，まず家康の第5子で，甲斐の名門武田氏の跡を継いだ武田信吉で，常陸十五万石を領して，水戸城に入った。しかし，信吉は，翌慶長8年病没し，代って家康の第10子，頼将（のちの御三家，紀州和歌山藩主頼宜）が，二十万石を貰って，水戸へ入った。しかし頼宜も，まもなく駿河遠江に転封したので，慶長14年12月，水戸の地には，三たび家康の第11男，頼房が，二十五万石を受封して，水戸藩の始祖となり，以来明治4年の廃藩まで，常陸地方最大の藩として存続した。

徳川頼房は始祖として，藩の基礎固めをすると共に，財政の充実を図って，徹底した検地を行い，また新田開発の奨励，農業生産力の増大に力を注いだ。なかでも藩の穀倉とされた久慈川，那珂川の流域，いわゆる珂北地帯の沖積層耕田の保全，利水に心をくだいた。とくに寛永末年から正保の初年において，水戸藩創始以来の大干ばつに遭遇し，そのため田畑の損害ことのほか甚だしく，関係農民の困窮の状態はとうてい一日も打ち捨てて置くことを許さないほど急迫していた。当時水戸藩庁においては，これの改善策の検討を重ねたが，農民の干害による損害を少なくすることは，ひとり農民の生活問題として極めて重要であったにとどまらず，ひいては水戸藩の財政上に及ぼす影響が大きかったのである。その時の水戸奉行は，望月五郎左衛門恒隆で，日夜，その対策に苦慮していた。正保2年，現在の常陸太田市町屋に住んでいた永田茂衛門なるものが，採鉱の技に練達していたばかりでなく，水利の術にも秀でていることを人伝てに聞き，藩主に上申のうえ，茂衛門父子を，八人扶持をもって藩に召抱え，現地の調査を命じた。

茂衛門父子は向う3年間，寝食を忘れて，久慈川，里川，那珂川の沿岸一帯を踏査し，その流水落差や，土地の高低，地目の所在を明細にして，工事の施策を練った。この調査結果は，望月奉行を通して，頼房に建議されて容れられ，辰の口堰の普請を手始めに，岩崎堰，小場江堰の水戸三大堰，または里川の諸堰を，つぎつぎに完成していった。堰の構築と同時に，用水路や，分水工の工事を行って，潅漑の便を図った。父茂衛門が，万治2年（1659）に亡くなると，子勘右衛門が，二代目茂衛門を襲名し，父の遺業を継ぎその功により，二代藩主光圀より円水の号を賜っている。水戸領内の水路，溜池は永田家の手になるものが多く，「新編常陸国誌」が永田父子の功績を称賛し，44堰，88溜池を創設したと激賞しているが，これはいわゆる不定数名詞としての数字と見られ，いかに多くの施設を考案したかを物語っている。なお，堰，水路，溜池の他に，円水は，その2子と共に，水戸の笠原水道，田見小路水道や常陸太田市の元久昌寺水道等の布設等，幾多の水戸藩における治水，利水工事に関与し，その子孫は代々，江堰の水守役をつとめ，その維持管理に努力した。この永田家の功績を世に伝えたのは，幕末期辰ノ口堰元詰役人であった加藤寛斉である。寛斉随筆「御領内江堰溜池大江筋之発端之記」に次のように，書かれている。

「御領内田方用水の堰，巨いなるは，小場，辰野口，岩崎を以，三堰と人口に膾炙せり，然れども，江下の豊饒肥良の地にして，御益の偉ひなるは，辰野口を第一とす。（中略）或人予に示て曰，中国より西国に距り，国々の用水堰の備を見し事ありしに，かかる辰ノ口のごとき大いなるはなしと，かかれば海内の逸と謂んか。（中略）元祖茂衛門，二代勘右

* 茨城県農地部（かわだ　こうじ）
** 〃 農地建設課（すがわら　ただくに）

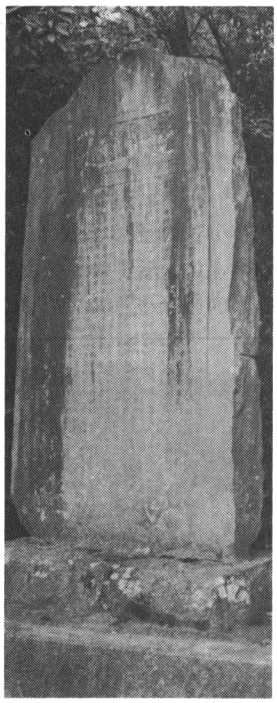

写真-1　永田一族の頌徳碑

衛門(後に円水と更む)其子勘右衛門，次男八郎兵衛に至る迄，各水理に通繞し，遣水の術実に神奇といわんか，斯粉骨せしより封内の村田闊け，国民食を甘じ，鼓腹するに至れり，かかれば甚功績いかんぞ偉ひならざらん，其千辛万苦，古への百分の今其一をしるのみ，(中略)，永田氏が砕身辛苦思うべし，渠の家の功労許多なりといへども，今其功子孫に及べり，近頃献金の徒家声を起すといへども，是と渠とは同日の論に非ず（後略)」

II.　永田茂衛門一族

永田氏の顕彰に努めた加藤寛斉は，彼が描き記した「辰之口堰分江全図」の添書のなかで，永田家の祖先のことにもふれている。

永田の祖先は累代茂衛門を襲名し，甲斐武田の隠し金山を経営していた黒川衆のひとりであった。現在の山梨県東山梨郡神金村萩原あたりが出身地らしい。天正十年，武田氏滅亡のあとは家康に仕え，引続き金山経営に従事していたが，そのころ諸国において，金銀を採掘することを幕府から禁止されたため，黒川金山の一統は離散し，茂衛門も零落して，浮浪人のようになった。そこで，茂衛門とその子勘右衛門は，水戸威公の政を慕い，常陸にて，金銀採掘の業に従おうと，寛永17年(1640)に江戸から現在の東茨城郡桂村錫高野に落着き，採鉱に当ったが，錫の値段が下落したため中止し，現在の常陸太田市町屋に住み，久慈郡，多賀郡内に鉱山を発見したので，水戸藩に願いでて，許可を得て鉱業に従事することとなった。すなわち，現在の日立市産業の基盤となった日立鉱山も，茂衛門が最初に発見し，経営していたものといわれている。このようにして，茂衛門は，採鉱を生業としていたが，甲州流の土木技術を目に見て育った父子が，同郷の望月垣隆に見出されて，水戸藩内の産業開発上，利水工事上に幾多の功績を残したことは前述のとおりであり，初代茂衛門は77才で没している。

二代目茂衛門は父を援けて，水戸藩の治水，並びに利水事業に力を注いだことはもちろんであって，ある一面から見ると，むしろ先代より二代目茂衛門の方が，利水開発の功績は大きかったといえる。すなわち，初代と共に金山を採掘しているが，父茂衛門の助手として辰ノ口堰の工事にも関与し，その他，堰，溜池，水路の築造，保全に精励したのみならず，水道事業にも，顕著な事績を残している。とくに寛文3年には，水戸の笠原水道の創設に関与し，功労が多かったことで，二代藩主義公から「円水」の号を賜わり，麻裃の着用を許されている。元禄6年（1694）75才の高齢で没すると，西山公からとくに「徳翁円水居士」の法名を賜わり，特段のおぼしめしをもって義公生母を祭った久昌寺内に墓地を下賜される等，水戸藩公が永田家に特別な扱いをされたのがわかる。なお，円水の生前における功労に対し，大正4年11月10日，大正天皇即位の大典に当り，従五位の位記を追贈されている。

円水には2子があって，兄弟共に協力して円水を援け，利水方法の研究を重ね，とくに八郎兵衛は花房村（現金砂郷村）の大溜池をはじめ，数々の堰，溜池等の補修管理に当り，両家の子孫とも廃藩になるまで，領内の主な堰，溜池の維持管理を担当し，代々連綿として栄え，富岡永田家の現戸主十四男氏も，第十七代で辰ノ口土地改良区の職員として，堰，用水路の管理に当っている。

III.　辰ノ口堰

辰ノ口堰は，始祖茂衛門の水戸領において施行した利水工事のうち，最も大規模であり，かつ，常陸に来往してから最初に施行した利水工事であるので，特筆する価値があろう。永田父子が，全く寝食を忘れて，これが大成を期して工事の計画をたて，まず，久慈川左岸の，辰ノ口に堰元を設け，用水路を山裾づたいに南下せしめた。そのための土地の高低，流水の落差，堤塘の築造，水路の開削など，日夜，これらの測量に専念した。土地の高

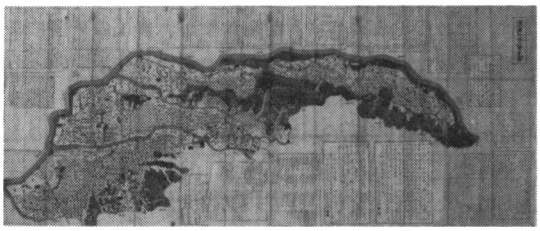

写真-2　「辰之口堰分江全図」130年前の古図
（永田家の事蹟等も添書されている）

低を測るには，昼は白布を竹竿に結びつけ，夜間は提灯をともして測った。また，竹管式水準器を使用する等，新奇な方法を採用し，当時としては，極めて科学的な測量を行った。

取入堰は，正保4年（1647）に着工され，横幅1.8mに順次支柱が建つと，竹製の蛇籠に砂利が詰められて集積される。次第に川幅が狭められるに従って水勢はさらに幾倍加し，ようやく堰止めができようとしてはまた崩壊し，翌朝再び現場に行ってみると，流出していて，全く「賽の河原」だと，工事を見聞して嘲笑するものもあったが，慶安元年（1648）春までに築きあげられた。いよいよ取水入口の閘門ができ，歓呼のうちに閘門が開かれ，流水は白蛇のような勢いで，開削された用水路を南下し，茂衛門父子をはじめとして，関係者，農民の喜びは大きかった。しかし，用水路の底が割れて水が洩れ，下流にも用水が届かなかった。これを見て，一時歓喜した農民は失望も著しく，これが転じて，誹謗，嘲罵の声は，あげて茂衛門父子に注がれ，あわや一大事をも起しかねない状況を呈するほど険悪なものとなった。加えて円水が入牢する騒ぎになり，茂衛門父子苦心の事業も，一時中断することを余儀なくされた。

しかし円水が獄中においても，漏水対策を思案し，考究の結果，成案を得，獄中より献言し，再び辰ノ口堰工事は始動し，籾殻の灰と泥を，上流から流したり，溝底にむしろを敷いて岩の割れ目をふさいだ。こうして，数日の後，漏水のカ所は，いつとなく完全に閉塞されて，流水はこんこんとして昼夜を分たず流下した。やがて，誹謗の声は再び，永田父子の功績礼讃の辞と化した。江下21カ村，その潅漑反別は約一千町歩で，従来総石高一万八千八百俵のものが，一躍にして二万二千五百俵余の収益となり，永田茂衛門父子の辛酸苦労の甲斐があって，前後5カ年の歳月をかけた辰ノ口堰は，慶安2年(1649)に竣工した。

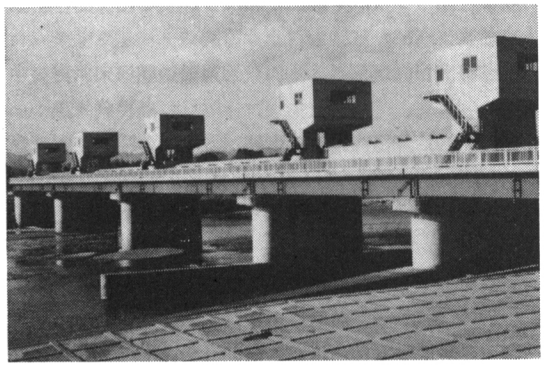

写真-3　現在の辰ノ口堰

その後，元禄12年(1699)三代目勘右衛門は，この辰ノ口堰をさらに25m延長して約90mとし，同時に，水田を買上げて吉田溜をつくり，用水を溜めて危険時に備えたり，山田川に薬谷堰，藤田堰を設けて，潅漑用水の充足を図った。辰ノ口堰は，そのあとも，度々の洪水で，幾度も築造替えをしており，文化10年（1813），天保9年（1838）には，堰の根元から完全に崩壊し，工事不能になったので，約180m上流に取入口を移したが，九代目八郎兵衛がこの施工に当った。現在の堰は，大正15年に大改築した石張固定堰が，幾多の災害と下流の河川河床の低下で，堤体が危険となったので，昭和51年から用水障害対策事業として着工し，堰高3.75m，堰長218.5m，洪水吐，土砂吐，魚道，舟通しを備えた近代的施設が昭和57年度に完了し，また用水についても，昭和34年から県営潅漑排水事業により21,248mをコンクリート水路で改築している。現在の受益面積は1,130haで，組合員2,214人の土地改良区により管理が行われている。

IV.　その他の主なる施設

1.　岩　崎　堰

辰ノ口堰の上流約3kmに造られた岩崎堰は，初代茂衛門が計画し，その子円水も父の助手として，工事の実施に当り，容易ならぬ苦心を払って完成したものである。岩崎堰は，慶安元年（1648）に辰ノ口堰の起工に次いで着工され，久慈川右岸岩崎村（現那珂郡大宮町）で取水，当時の堰は延長133m，高さ2.1m，竹蛇籠をもって締切り，用水路は，幅3.6m，深さ1.8m，江の長さは木崎村門部まで約22km，潅漑面積655町歩，江下18カ村を潤した。本堰の特徴は，まず取入口で，水量を自由に調節できる木造大閘門を取付けたこと，次に，用水路をほぼ一定の勾配にするため，高地では樋管を埋め，低地では掛樋を架けたこと，さらに，余分な水を排水する吐閘門を造ったことである。

この岩崎堰の維持についても，辰ノ口同様，始祖永田茂衛門以来，その子孫が代々水積となって維持工作並びに管理に当ったが，水戸藩においても，始祖頼房公以来11代続いた藩主のうち，光圀，治紀，斉昭の3人までが岩崎堰を訪れ，永田家子孫を謁見するなど，江堰に関心を示している。現在の堰は旧堰よりさらに3km上流の山方町大字山方に，県営農業水利事業によりコンクリート固定堰として昭和35年度，築造したものである。

2.　小 場 江 堰

辰ノ口堰永久水積役の恩典に与った永田父子の栄光は，一段と拍車がかかり，領内全般の利水のため，研究に精進することになったが，那珂川沿岸一帯もまた，用

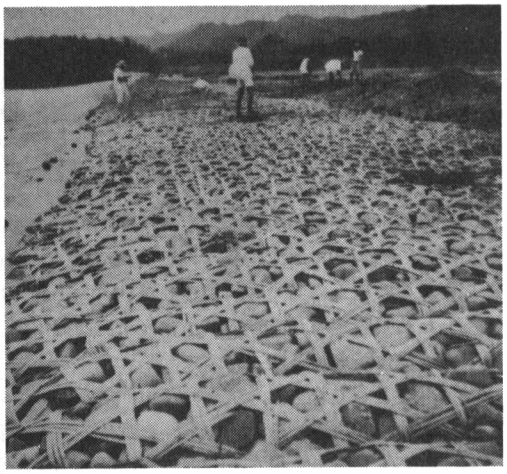

写真-4 昔の蛇篭堰（岩崎堰）

水路の必要に迫られ，明暦2年（1656），まず下江戸村天狗岩付近に取入れ施設を造ったが，ここは河床の激変のため水のりが悪く，万治元年（1658），約4km上流の小場村江口に移して完工した。この小場江堰は，自然取入れであったようで，長さ百間，水路の延長五里余と記録にある。本堰は堰口にトビラ式大水門を設けたことと，水路の障害になった岩場に，長さ29mのトンネルを掘って水を流したことが特徴といえる。現在の取水は，さらに上流大宮町三美に昭和47年度に長さ308m，堰高2.1mの頭首工を造って潅漑している。受益面積は1,046haである。

3. 笠原水道

元来水戸城下町は，上市，下市とも，飲料水に不便を来たし，上市は深井戸，下市は低地のため，地下水は出るが，飲料水には不適という状況であった。そこで寛文2年（1662）二代藩主光圀は，奉行望月五郎左衛門に命じて水道事業を計画した。もちろん二代目茂衛門および，その子等が実際の布設を担当した。すなわち，笠原不動谷の湧水を約10km導水し，わが国18番目の水道，水戸領内最初の水道として，下市に給水した。

他藩の水道が，明渠であるのに対し，笠原水道は暗渠であり，岩を材料に使ったりして，特筆すべき施設を造っている。笠原水源は，現在も水戸市の水道源の一部として使用され，保存されている。

V. あとがき

常陸に普及していた伊奈流の土木技術と，甲斐の信玄流，甲州流の治水技術，さらに，これに鉱山技術をミックスさせて多くの堰堤，溜池，用水路，上水道の利水施設にかかわった永田一族の功績は多大なものがあり，永田家の計画，監督にかかわる利水工作物は，水戸領全域に分布し，一説では，溜池だけでも，三百数十カ所といわれ，記録に残されているものでも，北は，保内郷（42カ村）現在の大子町から，久慈郡，那珂郡，多賀郡，南は東茨城郡常澄村までに及んでいる。

以上のように，永田家の始祖茂衛門をはじめ円水とその子孫は，水戸領内における利水事業の基礎をつくった人々で，とくに過去において，干ばつによる不作は宿命的なものと締めていた当時の人々の観念を転換させ，天災もまた対策を講ずれば，被害を最小限にできるという力強さを会得させた功績は，まことに偉大なものがある。また，円水は，農業用施設にとどまらず，飲料水をも手がけ，水戸その他における水の危難を救った事績は特筆に値するものである。永田家の子孫もまた先祖の遺訓を守り各種施設の維持管理によく力を尽くし，水戸藩の農政上はもとより，藩財政に寄与し，水戸三十五万石のいしずえを築いたものである。

引用文献

1) 高橋六郎著：月刊誌「水利と土木」（水戸藩の利水事業家永田茂衛門一族とその事蹟について）（1956）
2) 篠原卯之吉，吉原 魁著：珂北利水沿革史（1956）
3) 朝日新聞水戸支局編：茨城の科学史（1978）
4) 久保田治夫著：茨城開発の歩み（1979）
5) 宇野悦郎著：辰の口堰沿革史（1983）

〔1984．1．13．受稿〕